平成30年度
UR
ひと・まち・くらし
シンポジウム

2018.10.16　阪急うめだホール

特別プログラム

甲斐徹郎さんが語るコミュニティを機能させる方法とは

甲斐 徹郎 氏　株式会社チームネット代表取締役 / 建築・まちづくりプロデューサー

大阪で行われた『UR ひと・まち・くらしシンポジウム』の中から、建築・まちづくりプロデューサーの甲斐徹郎さんによる講演の内容を再編集してお届けします。暮らしの中でのコミュニティのあり方について実際のプロジェクトでのエピソードをまじえながら、実践的な話が語られました。

甲斐 徹郎

1959 年生まれ。株式会社チームネットを設立して、多くの環境共生プロジェクトを手がける。また、個と個の関係性を連鎖させることによって豊かなまちづくりを実践するプログラムをいくつも開発し、幅広い分野で活躍。著書に『人生が変わる住まいと健康のリノベーション』（新建新聞社）、『不動産の価値はコミュニティで決まる』（学芸出版社）、『まちに森をつくって住む』（農文協）、『自分のためのエコロジー』（ちくまプリマー新書）など。

1 「コミュニティは煩わしい」という本音

今回お話させていただくにあたり「未来の暮らし」というテーマをいただきました。こうしたテーマでは建築的なハードのことが議論されがちですが、私は徹底してコミュニティの話をしたいと思います。コミュニティのことを語るとき、その必要性を否定する人は誰もいないものなのですが、問題となるのは、コミュニティを住宅の事業の中に導入し、暮らしの中に位置づけようとしたとき、コミュニティへ関わることを否定的に捉える人がとても多いということです。コミュニティというものは、そうした難しい問題を抱えています。

私の仕事のひとつを例としてお話しします。2003年に「環境共生住宅」という考え方のもと、東京・世田谷の真ん中に「森をつくって暮らそう」という呼び掛けで、15世帯の家族が集まり集合住宅がつくられました。それは「欅ハウス」と名付けられ、中庭に残した樹齢250年のケヤキを中心にコミュニティを築きながら、すばらしい環境を実現させた住宅です。このプロジェクトを記録した映像を「コミュニティデザイン論」という大学の授業の中で学生たちに見せて、「あなた達は実際にここに住んでみたいと思いますか」と、私は必ず授業の初回に問いかけるようにしています。はたして何割ぐらいの学生が「住みたくない」とはっきりと言うと思いますか。
なんと、「住みたくない」方に手を挙げる学生の割合は、およそ6～7割です。大学でコミュニティデザインを勉強する学生たちですから、議論をさせればすべての学生が「コミュニティはいかに重要か」ということを論じます。にもかかわらず、いざ実際に暮らす場での話になると、コミュニティに対して否定的になるのです。それはどうしてなのか。その多くの理由は「煩わしそうだから」。これが本音です。社会的な縮図がここにあると感じます。つまり、コミュニティの重要さは誰もがわかっていますが、実際に自分の暮らしの中でと考えると、「それは煩わしい」と思ってしまうというわけです。

2 コミュニティが重視されなくなる社会構造

こうしたねじれた意識はどうして生まれるのでしょうか。私は、コミュニティが重視されなくなる社会構造があるからだと思っています。それは、「便利になればなるほど関係性が省かれる」という構造です。たとえば、昭和初期の食卓の様子を画像検索で探してみると、そこには多世代からなる家族が大勢で集まっていて、仲睦まじく食卓を囲んでいる様子が写っています。この頃は、大家族ゆえにこうした食卓の風景が当たり前だったと考えられがちですが、別の見方をすると、当時は薪から火をくべていたという調理器具の不便さが影響していたのだということがわかります。当時の調理器具は、今と比べてとても料理に時間と手間がかかるものでした。ですから、現代の暮らしのような「おなかがすいたから何かつくって」「じゃ、つくりましょう」という対応はできませんでした。料理をつくる時間、食べる時間は明確に決まっていて、そこに家族が集まってくるという方法でなければ成り立たなかったわけです。つまり、調理器具の不便さによって、密な人間関係が必然として生まれていたわけです。
これが現代になれば、たとえば、ファストフード店で複数の人が食事をしているという風景が象徴的ですが、その背景には、スイッチひとつで瞬間的に料理をつくることができる調理技術の進化があります。他人に左右されることなく、人々は自分のほしいものを自分のために、好きな時間に手に入れることができるようになりました。そして、隣りに座っている見知らぬ人と会話をすることもなく、誰もが孤立して食事をするようになります。こうして、便利になることで関係は省かれていくわけです。

そういう観点でまちを見直してみれば、昔は、互いに関係性を持ちながら、自分たちの暮らしを成り立たせていたということがわかります。たとえば、台風の通り道にあたる沖縄では、構造的に弱い木造住宅を台風から守るために各敷地の四方に防風林が植えられ、それが豊かな街並みをつくっていました。住宅が台風で壊れてしまうという不便さを補うことが、まち全体の環境を生みだしていたのです。ところが、沖縄では70年代に入ると住宅のコンクリート化が進み、台風に直撃されても住まいは壊れなくなります。その結果、住まいの周りに樹木を植えることはなくなってしまいました。
こうしたことの結果として、ひとは家の中に閉じこもり、外との関係は失われて、互いに協力するという人間関係も希薄になっていきます。テクノロジーの進化によって、便利さが増大する一方で、関係性は省略されていくということが、沖縄だけではなく全国いたるところで進んできたのです。逆にいうと、関係性を省くことが便利さなのだともいえます。昔は、他者との関係が煩わしいなんてことは言ってられませんでした。ところが、他者との関係を省略しても暮らすことはできるようになってきましたから、結果として、コミュニティが失われ、他者との関係は煩わしいという意識が生まれる。そうした社会的な構造があるのです。

3 でも、コミュニティなしでは生きていない

これだけ便利になってるわけですから、コミュニティに依存しなくても私たちは生きていけます。それでもコミュニティは本当に必要なのでしょうか。もうこれからは、コミュニティは不要になってしまうのでしょうか。そのことを考えてみたいと思います。

このことを考えるために、ふたつの状況を皆さんに提示します。どちらかを必ず選んでください。
A は「逃亡者」です。
悪いことをしたわけではないですが、自分のこと知る人のいない土地へ行って、自分の素性を明かさずに生きていかなければなりません。そして、生涯、その土地をでることはできません。
B は「記憶喪失」です。
ある日、目を覚ますと記憶が失われていて、自分自身が誰なのかわからない。けれども、周囲の人は自分のことをよく知っていて、親切に接してくれます。そして、生涯、自分の記憶は戻りません。
このAとB、あなたはどちらの状況を選択しますか。必ずどちらかを選んでください。

……実は、この問いに答えはありません。何が正しいのかという話でもありません。どちらを選ぶのも嫌ですし、悩まれたと思います。この問いかけは、他者との関係なくして、自分という存在は成り立たないということを確認するためのものでした。自分らしさ、アイデンティティというのは、常に自分と他者との関係で成り立っているということ。実は、このことが本質的なコミュニティの意味だということに気付かれたでしょうか。つまり、煩わしいのは嫌だけれど、一人ぼっちも嫌。人には認められていたい。この矛盾のなかで、コミュニティをうまくつくり出し、つき合っていかなくては、私たちは幸せにはなれないということなのです。
次に、この矛盾をどのように解決していけばいいのかという話をしたいと思います。

4 煩わしさを意識させずに コミュニティを機能させる方法

多くの人がコミュニティを煩わしく思うものだということを前提として、それでもコミュニティを機能させるためにどうすればいいか。そのために私が編み出したコンセプトがあります。それは、「コミュニティベネフィット」という考え方です。これは、コミュニティを目的とせずに、手段とすることで、個人の単位では不可能なほどの大きな価値を実現させるという考え方です。個人単位では手に入らない大きな価値を得るためにはコミュニティが必要で、それを手段として活用しようというのが「コミュニティベネフィット」の考え方です。

このことを先ほどの世田谷の欅ハウスの例で説明しましょう。欅ハウスは、「コーポラティブ方式」という事業方式が採用されました。私たちが集合住宅を購入するという場合、マンション開発会社が建設し、出来上がった一室を購入して住むというのが一般的ですが、コーポラティブ方式の場合は、入居予定者が集まって建設組合をつくり、その組合が発注主となって設計、施工会社と直接契約を結び、集合住宅を建設するという方法で進められます。
こうしたプロジェクトを成功させるための心構えについて、私は参加者に対して次のような説明をします。それは、「仲良くなることが目的ではないので、がんばって仲良くなろうとする必要はない」ということです。参加者全員が仲のいい人間関係が形成されるかどうかは、気にしない方がいい。全員が仲良くならないといけないと位置づけると、それが強迫観念となり、そこにこのプロジェクトに参加することの息苦しさが生まれます。重要なのは、仲がいい悪いに関わらず、個人単位では実現できない価値を手に入れるために協力し合う、という合理主義的な考え方なのです。
ですから、私がコーポラティブ事業をコーディネイトする場合、建設組合活動において「人間 関係」をつくりだすことにあえて重きを置かないようにするのです。重点を置くべきポイントは、事業の中で、常にその場面での「コミュニティベネフィット」は何かを明確にすることです。つまり、個人単位では手に入れることのできない大きな価値とは何かを明確にし、その価値創造のための必然として、協力関係を導き出すことを意図するのです。協力し合うことの目的が明確であれば、参加者の合理的な意思に基づいた合意形成が円滑に進みやすくなります。
そして、欅ハウスの場合の「コミュニティベネフィット」こそが、樹齢 250 年の欅の樹を暮らしの中心に位置付けることだったわけです。
私が実践した煩わしさを意識せずにコミュニティを機能させるということは、そういう方法です。

5 大阪・香里団地での試み

「コミュニティベネフィット」の観点から、URで実際に実践した大阪府枚方市の香里団地 D51 棟での「デゴイチプロジェクト」と銘打った事例をご紹介します。そこではあらたにエレベーターをつけて建物全体を改修するという計画が進められていました。この機会を活かして、ただエレベーターをつくるだけでなく、足元の共用空間にも手を加えて「コミュニティベネフィット」を生み出すという試みが行われたのです。

香里団地 D51 棟エントランス

D51 棟で「コミュニティベネフィット」を生み出すために、環境のデザイン手法として応用されたのが「アフォーダンス」という心理学の考え方でした。人は自分の意志ですべての選択をして行動しているように思われがちですが、実は、気がつかないうちに「環境に従って行動している」というのがアフォーダンスの考え方です。むやみにコミュニティ空間をつくってみても、人はそこに集まって関係を持つことにはつながらない。アフォーダンスの考えにもとづくと、人が必然的にそこに集まる環境をデザインすることが大切だということになります。「デゴイチプロジェクト」でいえば、エントランスという必ず住人のみなさんが通る空間を、誰もがときめいてしまうくらい素敵で、最高に心地のいい場所にできれば、住人のみなさんは必然的にそこで関わりあうようになるというように考えるわけです。ただ広場をつくって、そこを活用したイベントを企画して人為的に参加させようとしても人はなかなか集まってこないものです。そうではなく、アフォーダンスの考えにもとづいて人が関わる道理をデザインする。その必然として人間関係を生みだす。「コミュニティベネフィット」を実践するためにはこのアフォーダンスの考え方がとても大切になります。

タネ団子から育ったお花の手入れ

こうして進められたデゴイチプロジェクトですが、その中で最も盛り上がった場面は、「タネ団子」という花壇づくりのプログラムでした。粘土状の土を小さなお饅頭くらいの大きさにまるめて、そこに肥料を練り込み、そのダンゴに種をまぶすのですが、この手でこねる作業をするだけで誰もが子供のように面白がり、それをみなさんで花壇に植えるのです。すると、しばらくの間ずっと水やりをしなければいけないのですが、自分たちが植えたタネ団子を育てようと、独自に当番をつくって育てるようになりました。そうしてお花の成長とともにだんだんと人間関係が深まり、広がっていったのです。

この「デゴイチプロジェクト」のことをご紹介すると、もともと濃厚な人間関係があった団地だから成功していると考える人がいるかもしれませんが、それはまったく違います。実は、必ずしもエレベーターの設置が全ての住人に喜ばれているというわけではありませんでした。中には、エレベーターが自宅の玄関近くに設置されることを懸念される方もいらっしゃいましたが、他の参加者と一緒にプロジェクトに関わるうちに、周りの他人が喜ぶ姿を見て感動するというエピソードまで生まれました。みんなが賛成することはまれで、意見が分かれることが多いというのが、コミュニティの面倒なところでもありますが、暮らしの日常の環境をよりよくして、アフォーダンスという原理を作用させてそれを乗り越えていく。UR のような緑の空地が多く、豊かな環境に恵まれた団地では、こうして環境をいかして、コミュニティを機能させていくという取組みがとても適しているということを、デゴイチプロジェクトでの試みを通して強く感じました。

D51 棟のアプローチガーデン（撮影：角田和範）

お披露目パーティーの様子

デゴイチでの住人どうしの関係は、どこまでも拡張していき留まることを知らず、香里団地で動き始めたコミュニティは今後も維持されていくことだろうと思います。そして、このコミュニティが自分たちの暮らしの場を豊かにし、その豊かな環境がさらにコミュニティの関係性を深めていく。そして、そのコミュニティが住人ひとりひとりにとっての幸福感を担保している。こうした動的にどこまでも発展し続ける実態こそがコミュニティの本質であり、こうしたコミュニティを機能させることが、閉塞した現代の暮らしを見直す上で求められているのだと思います。

本日お話したことが、未来の暮らしを考える際に役立てば、本当にうれしいと思います。どうもありがとうございました。

※2018 年 10 月、大阪・阪急うめだホールでの『平成 30 年度 UR ひと・まち・くらしシンポジウム』内で行われた特別プログラム「コミュニティとテクノロジーが織りなす「なつかしい未来」−「自立」と「共生」の両立とは−」の内容を再構成したものです。